

⇒ 論 説 ⇐

『ハムレット』 5幕2場の Q2-only Passage に関する一考察

辻 照 彦

はじめに

『ハムレット』の最終シーンである5幕2場には Second Quarto (Q2) には見られるが、First Folio (F1) からは欠落しているいわゆる Q2-only passage が2つある。1つ目は、オズリック・エピソードの中の、オズリックが凝った表現でレアティーズを称賛し、それに対してハムレットがさらに難解で凝った表現で応答してオズリックを困惑させるパッセージである。2つ目は、無名のロード (Lord) が登場し、ハムレットにフェンシング・マッチの都合を再確認するロード・スピーチである。

これらのカットについて、どちらも F1 から意図的にカットされたものであるという点では研究者の意見は一致している。しかし、そのカットを行った人物に関しては、シェイクスピア自身とする研究者とシェイクスピア以外の劇場関係者とする研究者に分かれる。作者自身によるカットと考えている代表的な研究者は、W. W. Greg, J. M. Nosworthy, そして G. R. Hibbard である。

Greg は F1 でカットされている Q2-only passage について、4幕4場の最長のカットだけを例外扱いにし、それ以外のカットについては、‘as regards the other cuts we have some reason to believe that they were made by his own hand and marked in the foul papers.’ と述べて、シェイクスピア自身によるカットと考えている。ロードについては、オズリック退場後に無意味に (pointlessly) 登場し、オズリックのメッセージを無駄に (superfluously) 繰り返していると述べて、それを不必要なもののみなしている¹⁾。

Nosworthy も Q2-only passage 全般について、シェイクスピア自身が Q2 の原稿に付けた削除の印を植字工が無視したものと考えている。彼は、‘Several of the passages involved seem superfluous or redundant — the Lord’s speech at V. ii. 203, which merely repeats the message already delivered by Osric, is an obvious example — and this, no doubt, is why Shakespeare rejected them.’ と述べて、Greg 同様に、ロード・スピーチを重複した無駄なもの代表例と見なしている。

さらに Nosworthy は、オズリック・エピソードのカットについて、シェイクスピアは気取った宮廷言語の凝ったベン・ジョンソン風の戯画化へと一度は誘惑されてしまったが、ポローニアス一人で十分であることに気が付いて、すぐにまた元の計画に立ち返ったのかもしれないと

推測している²⁾。

Hibbard は、オズリック・エピソードの Q2-only passage について、F1 はそれを、‘Sir, you are not ignorant of what excellence Laertes is at his weapon’ という一文に短縮したのだから、カットはこの芝居から凝りすぎた部分を削除するために行われたことは明白のようだと述べている。ロード・スピーチについては、何の役にも立たないのに役者が一人余計に必要となる (serve no useful purpose and require an extra speaking actor) と述べて、Dover Wilson でさえこの部分のカットを明白な改善と認めていると紹介している³⁾。

5幕2場のカットを作者以外の人物の行為と考えている代表的な研究者は John Dover Wilson と Harold Jenkins である。Dover Wilson はオズリック・エピソードのカットについて、しゃれ者による非常に難解なレアティーズの描写とそれに勝るとも劣らないほど難解なハムレットによる応答なので、私たちはカットした人物 (the abridger) に共感はないが、彼の気持ちを理解することはできると述べている。さらに、彼のカットの手際が職人的であることに触れて次のように述べている⁴⁾。

Indeed, it is in this cut, of all the cuts in the text, that the presence of his hand is most unmistakable. To have deleted forty-one lines and done no more would have broken the thread of the dialogue, since it would have removed all reference to Laertes and his weapon, and so left what follows without meaning. The abridger accordingly mended his rent by reading “Sir, you are not ignorant of what excellence Laertes is at his weapon”, a sentence which does not actually occur in Q2, though every word of it is Shakespeare’s.

オズリック・エピソードの Q2-only passage を単純にカットしたのでは次のフェンシング・マッチの話題に上手くつながらなくなるという欠点には誰でも気が付くだろう。Dover Wilson は、その処理の仕方、即ち、カットした部分から必要不可欠な要素を抽出し、それをシェイクスピア自身の表現を巧みに組み合わせることによって再構成した点に注目している。そして彼は、その手際の良い処理の仕方に、他のカット部分よりも顕著に作者以外の人物の関与が表れていると考えている。

Dover Wilson はロード・スピーチのカットについても比較的長めに言及している。彼は、このカットには役を一人分節約できるという演劇上のメリット (the theatrical merit of saving a part) があると述べて、ロードは、オズリックに託されたメッセージと質問を繰り返すに過ぎないと指摘している。さらに、シェイクスピアがロードを導入した理由について彼は、オズリックがハムレットの返事を王に伝えた際に、王がオズリックの難解な説明を理解できず、再確認のために二人目の使者を送らざるを得なかったことを観客に示すためではないかと推測している。Dover Wilson は、‘But the Osric business is over-long in any event, and it is difficult not to regard the F1 cut as a definite improvement.’ と述べて、このカットによる唯一の深刻な喪

失は、‘use some gentle entertainment to Laertes, before you fall to play’ という、王妃からハムレットに向けた助言だけだと結んでいる⁵⁾。

Harold Jenkins はオズリック・エピソードのQ2-only passageについて、レアティーズを称賛するスピーチは4幕7場で王がレアティーズに説明していた計画が実行されたものであると指摘した上で、F1がそれを一文に短縮していることを‘an obvious playhouse cut’とするDover Wilsonの見解を紹介している⁶⁾。Jenkinsはロード・スピーチのカットの行為者や理由については特に言及していない。

Philip Edwardsは5幕2場のカットについて、明らかに、プロットに不可欠でない内容を削除することによって、最終シーンに至るこの非常に長い展開を短くしようとする試みと見なしている。彼は、最初のカットはもっぱらオズリックの言葉遣いをからかって笑うものであり、2番目のロード・スピーチのカットは、この芝居に必要なとはいえない追加的な登場人物を省略していると述べている⁷⁾。

本論では、5幕2場のQ2-only passageの中で、特に、ほとんどの研究者が、オズリックのメッセージを繰り返すだけの無意味なパッセージと見なしてきたロード・スピーチに焦点を当てたいと思う。フェンシング・マッチに関する情報の流れという視点からQ2を読み直し、ロード・スピーチがそこでどのような機能を果たしているのかを分析し、それを削除することは、5幕2場前半の展開にどのような影響を与えるのかを考えてみたい。また、F1と同様にロード・スピーチを削除しているといわれるFirst Quarto(Q1)の展開を分析し、Q1にロード・スピーチの痕跡が存在するかどうかを考えてみたい。

Q2におけるフェンシング・マッチに関する情報の流れ

最初に、Q2の5幕2場において、フェンシング・マッチに関する情報がどのように伝えられているのかを詳しく見てみることにしよう。まずオズリックは、登場してしばらくは、王から託されたメッセージを要領よく伝えることに苦勞する。オズリックが‘I should impart a thing to you from his majesty.’と切り出すとすぐに、脱帽したオズリックに帽子を被らせようとするハムレットのからかいが始まる。しばらくしてオズリックは再び‘But my lord, his majesty bade me signify to you that a has laid a great wager on your head.’と切り出す。オズリックは凝った表現でレアティーズを称賛するが、ハムレットにそのパロディーで応酬されすっかり当惑してしまい、またもや肝心のメッセージを伝えられない。この部分はF1ではカットされている。オズリックがやっとレアティーズが剣の名手であることを伝えたとこで、ハムレットが次のように質問する⁸⁾。

Hamlet	What's his weapon?
Osric	Rapier and dagger.

Hamlet That's two of his weapons, but well.
 Osric The king sir hath wagered with him six Barbary horses, against the
 which he has impawned, as I take it, six French rapiers and poniards,
 with their assigns, as girdle, hangers, and so. Three of the carriages in
 faith are very dear to fancy, very responsive to the hilts, most delicate
 carriages, and of very liberal conceit.

(5.2.131-8)

ここでは王とレアティーズがフェンシング・マッチに賭けた賞品が説明されている。クロウディアスは名馬6頭を賭けており、フェンシング・マッチが途方もない賭けの対象になっていることが強調されている。直後にハムレットにからかわれることから分かるように、オズリックはレアティーズが賭けた剣と付属品を大変凝った表現で説明しているが、賭けられた賞品に関する限り、王のメッセージははっきりと伝えられている。

ハムレットに凝った表現をからかわれた後、オズリックは次のように説明を続ける。

Osric The king sir, hath laid sir, that in a dozen passes between yourself and
 him, he shall not exceed you three hits. He hath laid on twelve for nine.
 And it would come to immediate trial, if your lordship would vouchsafe
 the answer.
 Hamlet How if I answer no?
 Osric I mean my lord, the opposition of your person in trial.

(5.2.147-52)

ここでオズリックは、フェンシング・マッチのルールと試合の時間について説明している。ルールは、12回戦で3点以上差をつければレアティーズが勝利するという内容になっている。それに続く、'He hath laid on twelve for nine.' という説明は長年研究者を悩ませてきた有名な箇所だが、ハムレットは勝敗のルールを困難なく理解しているように見える。

ここでは、決して王がフェンシング・マッチをハムレットに無理やり押し付けるような形になっておらず、王からの非常に丁寧な要請、あるいは都合確認になっていることに注意すべきである。試合の時間については、すぐにも行いたいという王の意向が伝えられているが、ハムレットが相手をしてくれるならばという条件が付けられており、少なくとも表面的には、ハムレットの都合に配慮した丁寧な要請になっている。また、試合の場所については、王の意向は一切伝えられていない。

オズリックの説明に対してハムレットがどのような返事をしているか見てみよう。

- Hamlet Sir, I will walk here in the hall. If it please his majesty, it is the breathing time of day with me. Let the foils be brought, the gentleman willing, and the king hold his purpose, I will win for him and I can. If not, I will gain nothing but my shame and the odd hits.
- Osric Shall I redeliver you e'en so?
- Hamlet To this effect sir, after what flourish your nature will.
- Osric I commend my duty to your lordship.
- Hamlet Yours, yours.

(5.2.153-61)

ここでシェイクスピアは、ハムレットがオズリックと話をしている場所と時間について特別な設定をしている。場所について言うと、ハムレットは、‘I will walk here in the hall.’ と言って、自分の方からフェンシング・マッチの場所を提案している。たまたまハムレットとホレイショーは宮中の広いホールで話をしており、そこはフェンシング・マッチを行えるほど十分に広い、おそらく、今までに何度か試合が行われてきたようなホールだったという設定になっているのである。

時間について言うと、今はハムレットにとっては夕食後の運動の時間に当たっている。ハムレットにとっては、たまたまホールにいるし、運動をする時間でもあるので、今すぐにここで試合をすることになっても自分としては構わないのである。しかし、いくら王側が早く試合をしたがっている (it would come to immediate trial) と言っても、今からすぐにとというのは急な話なので、ハムレットは王とレアティーズがそれでも構わないならば、という条件を付けている。ハムレットの返事も、王からのメッセージに劣らず、表面的には、相手の都合に配慮した慇懃なものになっていることに注意すべきだろう。

実は、ハムレットの返事の全体的なニュアンスは、‘Let the foils be brought’ 以下の解釈によってずいぶん違ってくる。ハムレットの台詞はQ2では次のようになっている。

Sir I will walke heere in the hall, if it please his Maiestie, it is the breathing time of day with me, let the foiles be brought, the Gentleman willing, and the King hold his purpose; I will winne for him and I can, if not, I will gaine nothing but my shame, and the odde hits.

全体的に句読法が曖昧だが、特に ‘Let the foils be brought’ 以下の区切り方は何通りも考えられそうである。ちなみに、F1でも、‘let the Foyles bee brought, the Gentleman willing, and the King hold his purpose; I will win for him if I can: if not, Ile gaine nothing but my shame, and the odde hits.’ となっており、基本的にQ2とほぼ同じ句読法になっている。

代表的なモダン・エディションの句読法は3つに分けられる。もっとも一般的なのは、すでに引用した Edwards の、‘Let the foils be brought, the gentleman willing, and the king hold his purpose, I will win for him and I can.’ というものである。Dover Wilson, Jenkins, Hibbard はこの句読法を選択している。この句読法を採用している編者は、‘Let the foils be brought,’ 以下を条件文と解釈しているのであり、ハムレットは、「もし剣をここに持ってきて、レアティーズもやる気があり、さらに王も気持ちが変わらないなら、できるなら王のために勝ちたい。」と述べていることになる。この台詞から判断する限り、ハムレットのフェンシング・マッチに対する態度は決して積極的なものではない。さらに、ハムレットはフェンシング・マッチの時間について一応自分の都合を述べているが、レアティーズと王の都合にも十分配慮しており、最終的な結論は王とレアティーズの都合を聞いてから判断するという形になっている。

2番目の句読法は、Horace Howard Furness に代表される、‘let the foils be brought; the gentleman willing, and the king hold his purpose, I will win for him if I can;’ というものである⁹⁾。この場合、‘let the foils be brought’ は命令文となり、ハムレットはオズリックに、とりあえずフェンシング用の剣をここに持ってくるようにまず命令していることになる。そして、剣の用意をした上で、「もしレアティーズもやる気があり、さらに王も気持ちが変わらないなら、できるなら王のために勝ちたい。」と述べていることになる。最初の句読法に比べて、ハムレットがフェンシング・マッチに積極的になっている印象が少しは感じられるかもしれないが、このケースでも、最終的な結論は王とレアティーズの都合にかかっているという状況に変わりはない。

3番目の句読法は、Joseph Quincy Adams のものである¹⁰⁾。Adams は、‘Let the foils be brought, the gentleman willing, and the king hold his purpose. I will win for him if I can;’ という句読法を選択している。これは、‘Let the foils be brought, the gentleman willing, and the king hold his purpose.’ までを命令文と解釈している句読法である。この解釈が妥当かどうかは別として、この句読法の場合、ハムレットはフェンシング・マッチの時間についてもっとも強く自分の意向を主張して、オズリックに、今すぐこの場所で試合を開始することを王とレアティーズに説得してくるように命令していることになる。

筆者は Edwards の句読法を支持し、‘Let the foils be brought,’ 以下は条件文と解釈すべきであると思う。ハムレットはフェンシング・マッチの時間について、今すぐ行うことを強く望み、それを積極的に提案しているというより、たまたま今なら都合がよいので、今すぐここで試合をしても自分としては構わないというくらいのニュアンスであると思う。

シェイクスピアの意図を知る手掛かりは、F1 でカットされているロード・スピーチにあると思われるので、次にそのパッセージを見てみよう。ハムレットが、オズリックのような軽佻浮薄な男が宮中で出世していくような風潮をホレイショーに嘆いているところにロードが登場し、王からのメッセージを次のように伝える。F1 では以下のやり取りがすべてカットされている。

- Lord My lord, his majesty commended him to you by young Osric, who brings back to him that you attend him in the hall. He sends to know if your pleasure hold to play with Laertes, or that you will take longer time.
- Hamlet I am constant to my purposes, they follow the king's pleasure. If his fitness speaks, mine is ready; now or whensoever, provided I be so able as now.
- Lord The king and queen, and all, are coming down.
- Hamlet In happy time.
- Lord The queen desires you to use some gentle entertainment to Laertes, before you fall to play.
- Hamlet She well instructs me.

(5.2.171-82)

ここで注目すべきは、フェンシング・マッチの時間について確認されたハムレットが、この時点でも、‘If his fitness speaks, mine is ready; now or whensoever, provided I be so able as now.’と述べて、試合の時間については、必ずしも今すぐ行うことにこだわっていない、いわばオープンな姿勢を見せていることである。シェイクスピアは、この時点でもハムレットにフェンシング・マッチに対して比較的無関心な態度を取らせているのである。ハムレットがこの時点でも今すぐに試合をすることにこだわりを見せていないのであれば、先のオズリックに対するハムレットの返事も、ハムレットが自分の意向を強く主張しているという解釈は誤りで、時間についてとりあえず自分の都合を王側に伝えたという解釈が正しいと言える。オズリックとのやり取りでは、まず王からフェンシング・マッチをすぐにも行いたいという意向が伝えられ、それに対してハムレットが、今すぐに自分がいるホールで行っても構わないというより具体的な提案を提示し、それをオズリックが王に伝えに行くという流れになっている。つまり、オズリックが退場する時点では、フェンシング・マッチの時間と場所は最終決定されておらず、ハムレットは自分の提案に対する王からの返事を待っていることになるのである。

実は、ハムレットがフェンシング・マッチの開始時間と場所について初めて確信できるのは、ロードの‘The king and queen, and all, are coming down.’という台詞によってである。ロードのこの台詞は、一見、なんでもない台詞のように見えるが、ここまで未決定の状態が続いてきたフェンシング・マッチの時間と場所について、登場人物と観客に最終確認させるという重要な機能を持っているのである。

フェンシング・マッチがハムレットのいる場所ですぐに開始されることが確認された後、Q2では、ハムレットが死の予兆を感じる有名なオーギュリ・スピーチが続く。ロードが退場した後、ホレイションが次のようにハムレットに話しかける¹¹⁾。

- Horatio You will lose, my lord.
- Hamlet I do not think so. Since he went into France, I have been in continual practice; I shall win at the odds. But thou wouldst not think how ill all's here about my heart — but it is no matter.
- Horatio Nay good my lord —
- Hamlet It is but foolery, but it is such a kind of gaingiving as would perhaps trouble a woman.
- Horatio If your mind dislike anything, obey it. I will forestall their repair hither, and say you are not fit.
- Hamlet Not a whit, we defy augury. There is special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come — the readiness is all. Since no man of aught he leaves knows, what is't to leave betimes? Let be.

(5.2.183-96)

ハムレットが死の予兆である胸の痛みを訴えるオーギュリ・スピーチは作品全体の中でも極めて重要なスピーチである。オーギュリ・スピーチは、Q2、F1のみならず、Q1、さらには *Der Bestrafte Brudermord (BB)* にも見られる¹²⁾。ところで、Q2のロード・スピーチからオーギュリ・スピーチまでの展開を執筆した際のシェイクスピアの意図は比較的明白であると思われる。シェイクスピアは、ロードに王一行の到着を予告させ、登場人物と観客の緊迫感を高めた上で、ハムレットに胸の痛みを感じさせているのである。ロードがもたらす、王一行が間もなく到着し、フェンシング・マッチが間もなく開始されるという情報は、ハムレットが胸の痛みというオーギュリを感じるきっかけとなっているのであり、この意味で、ロード・スピーチはオーギュリ・スピーチを成立させるために不可欠な情報を含んでいることになる。

このような状況で、F1のようにロード・スピーチをカットするとどうなるだろうか。F1は、カットが引き起こす不整合を解消するために、直後のホレイシヨの台詞にQ2にはない、‘this wager’を追加し、‘You will lose this wager, my Lord.’としている。話題をフェンシング・マッチに戻すための苦肉の策と思われるが、ロード・スピーチが観客にもたらす切迫感を補えるような加筆とは到底言えないだろう。しかし、F1においても、オーギュリ・スピーチはフェンシング・マッチが目前に迫っているというQ2と同じ状況設定の下で演じられる。実際、F1でもホレイシヨは、試合がすぐに始まることのみならず、王一行が間もなく到着することも確信しているかのように、ハムレットに試合を断ることを勧め、王一行の接近を止めに行こうとするのである。

ロード・スピーチについてコメントした数少ない批評家の一人に Harley Granville-Barker がいる。彼は、ロードが登場するのは上演上の都合のため、即ち、インナー・ステージに玉座や

フェンシング・マッチ用の道具を用意する間の時間を埋めるためであったが、F1のテキストが固まった時にはその必要がなくなったので、F1では省略されたのかもしれないと推測している。彼は、シェイクスピアはQ2において、いつものように、無理に押し付けられたことを劇の利益になるように活用したと指摘している。その上で彼は、ロードとハムレットのやり取りの意義を次のように説明している¹³⁾。

And the impersonal phrases help resolve the scene (to pass from Osric's flummery direct would have been too abrupt a change) into its next and graver key. For there falls about Hamlet now the shadow of death.

「ロードの客観的なフレーズがこのシーンを次のより深刻な調子に変えるのに役立っている。」という指摘に筆者は賛成する。ロード・スピーチは、オーギュリ・スピーチのお膳立てをするものでもあり、両者は連続した一体のものと考えべきなのである。また、「オズリックのくだらない話からすぐに次の場面に移るのはあまりに唐突な転換である。」という印象も多くの読者が共有するものではないだろうか。しかし、その唐突感を感じさせる原因は、オズリック・エピソードとオーギュリ・スピーチのトーンの違いだけではないだろう。フェンシング・マッチの開始が目前に迫ってきたという重要な情報の欠如と、それに伴う切迫感の欠落も、唐突感を感じさせる重要な一因となっているように思われる。

Q1の展開とロード・スピーチの痕跡

F1と同様にロードに相当する登場人物を省略していることが知られているQ1で、オズリック・エピソードからオーギュリ・スピーチまでがどのような展開になっているのかを次に見てみることにしよう。Q1にはオズリックに相当するGentlemanが登場し、王から託されたメッセージをハムレットに伝えようとする。彼はQ2やF1と同様、しばらくハムレットにからかわれるが、その後、試合に賭けられた賞品などについて、ほぼQ2やF1と同じ説明をする。ハムレットが、‘And how's the wager?’と、試合の内容について質問するとGentlemanが次のように答える¹⁴⁾。

Gentleman Marry, sir, that young Laertes in twelve venies at rapier and dagger do not get three odds of you, and on your side the king hath laid and desires you to be in readiness.

Hamlet Very well, if the king dare venture his wager, I dare venture my skull. When must this be?

Gentlemanは、Q2と同じフェンシング・マッチのルールを説明した後、ハムレットに準備をしてもらいたいという王の意向を、Q2より直接的な表現で伝えている。最後のところでハムレットが試合の時間について質問しているが、これはQ1独自のものである。それに対してGentlemanは次のように答える。

Gentleman My lord, presently, the king and her majesty with the rest of the best judgement in the court are coming down into the outward palace.

Hamlet Go tell his majesty I will attend him.

Gentleman I shall deliver your most sweet answer.

(17.27-30)

Gentlemanはフェンシング・マッチの時間を尋ねるハムレットに対して、試合が今すぐに‘the outward palace’で行われることを説明し、さらに、王、王妃、そして他の廷臣たちがすでにその場所（シーンの続きから判断すると、ハムレットとホレイショーがいる場所）に向かっていることも告げる。興味深いことに、この部分ではQ2のオズリック・シーンにロード・スピーチが混入したような形になっており、Gentlemanから初めて説明を受ける時点で、ハムレットがその場で断らない限り、すぐに試合が始まってしまうという設定になっている。また、Q1では、Q2に見られた、王側、ハムレット側、双方による丁寧な相手の都合確認が消失し、試合の時間も場所も王が一方的に決めて、それをハムレットに押し付けているという印象が強くなっている。Gentlemanが、「待っていると陛下に伝えてくれ。」というハムレットの返事を王に伝えに行った後、オーギュリ・スピーチが続く。

Hamlet You may, sir, none better, for y'are spiced — else he had a bad nose could not smell a fool.

Horatio He will disclose himself without inquiry.

Hamlet Believe me, Horatio, my heart is on the sudden very sore all here about.

Horatio My lord, forbear the challenge then.

Hamlet No, Horatio, not I. If danger be now, why then it is not to come. There's a predestinate providence in the fall of a sparrow. — Here comes the king.

(17.31-9)

Q1のオーギュリ・スピーチはQ2のものとは比べるとずいぶん単純化されている。しかし、興味深いことに、Q1では、ハムレットが胸の痛みを訴える台詞の中に、Q2やF1には見られなかった、「突然に」(on the sudden)という表現が使用されている。これは、ハムレットが死

の予兆である胸の痛みをどのタイミングで感じるのかをよく伝えてくれているように思われる。ハムレットは、決して、一部の批評家が主張するように、少し前から嫌な予感がしていたのではないのである。ハムレットは、王が提案したフェンシング・マッチの時間と場所を受けて、試合が目前に迫ったことを観客とともに最終確認した直後に、突然、胸の痛みを感じるのである。

Q1のオズリック・エピソードからオーギュリ・スピーチまでの流れを概観して一番驚くのは、Q1ではハムレットとオズリックのやり取りが大幅に単純化されているにもかかわらず、王一行が間もなく到着する（すなわち、フェンシング・マッチが間もなく開始される）という情報が、まるでその重要性を理解しているかのようにQ1にも盛り込まれていることである。その結果、オーギュリ・スピーチへのアプローチに関する限り、Q1はF1よりもむしろQ2に近い展開になっている。表現はシンプルだけれども、王一行の到着予告により緊迫感を高めて、その直後にハムレットが死の予兆である胸の痛みを感じるという流れがQ1にも認められるのである。

ところで、先に引用したQ1の台詞には、ロード・スピーチの台詞と一致、あるいは類似した表現がいくつか見られる。まず、Gentlemanの‘the king and her majesty with the rest of the best judgement in the court are coming down’という台詞と、Q2-only passage中の‘The king and queen, and all, are coming down.’というロードの台詞の類似性が目を引く。この類似点に関してはQ1の编者であるKathleen O. Iraceも指摘している。彼女は、引用したGentlemanの台詞について、F1でカットされたパッセージの一部とおよそ平行的な表現になっていることを指摘して、‘are coming down’というフレーズがQ1に存在していることは、このフレーズが平凡なものであるため偶然の一致かもしれないし、あるいは、ロード・スピーチがQ1やQ2が出版された後にF1の原稿からカットされたことを示すものかもしれないと述べている¹⁵⁾。このGentlemanの台詞については、動詞表現の部分だけでなく、‘the king and her majesty with the rest of the best judgement in the court’という主語の部分も、特に内容の点で、ロードの台詞と類似していることに注意すべきだろう。

2番目に、ハムレットの、‘Go tell his majesty I will attend him.’というQ1中の台詞と、ロードの‘who brings back to him that you attend him in the hall.’という台詞の類似性が注目される。‘attend him’という表現は‘are coming down’に劣らず平凡な表現であるので、判断には慎重にならなければならないだろう。しかし、王を待っているという表現が一致しているだけでなく、そのメッセージを王に伝える、という点まで共通していることにも注意すべきだろう。

3番目に、Gentlemanの‘and on your side the king hath laid and desires you to be in readiness.’という台詞中の、‘desires you to’という表現は、ロードの、‘The queen desires you to use some gentle entertainment to Laertes.’という台詞中の‘desires you to’と一致している。確かに使われている文脈は異なっている。しかし、Q1のmemorial reconstructionという性質を

考えるならば、ロード・スピーチの表現の一部がごく近い別の箇所再生されたという可能性は考えられないことではない。

以上のような類似表現をどう考えればよいのだろうか。さらに決定的な類似点が見つければ、ロード・スピーチが初演時にカットされていなかったという一番簡単な結論を引き出すことができるだろう。しかし、Q1にロードに相当する登場人物がないことを考えると、先述した類似点だけで、ロード・スピーチがQ2のままの形で初演時に上演されたとは考えにくいかもしれない。たとえば、Q2、4幕3場25行目からの、‘A man may fish with the worm that hath eat of a king, and eat of the fish that hath fed of that worm.’というハムレットの台詞はF1ではすべて欠落しているが、Q1では、‘Look you, a man may fish with that worm that hath eaten of a king, and a beggar eat that fish which that worm hath caught.’ (11.128-130)というQ2に酷似した形で残っている。このケースの場合には、F1で欠落している台詞が、初演時の上演台本に含まれていたことを疑う研究者はいないだろう。しかし、5幕2場のロード・スピーチのような比較的長いパッセージの場合には、たとえ数か所の表現上の一致が存在したとしても、それが、直ちにパッセージ全体が初演時の上演台本に含まれていたことを示す証拠にはならないだろう¹⁶⁾。

もう一つの可能性として考えられるのは、ロード・スピーチは、一度、ロードという配役とともに台本からカットされたが、Q1の基となった上演台本の制作者は、ロード・スピーチを単純にカットするとフェンシング・マッチの時間と場所に関する情報が曖昧になってしまい、オーギュリ・スピーチへうまくつながらなくなることを認識していて、Gentlemanの台詞にロード・スピーチの一部を移植することによって、カットによって生じる影響を最小限に収める努力をしたということである。

実は、F1でカットされたパッセージの前後における重要な情報の欠落という特徴は、4幕4場のQ2-only passageの場合にも見られるものである¹⁷⁾。F1はそこで、ハムレットと隊長のやり取りとハムレットの独白を含む50行以上の台詞をカットしている。プロットに影響を与えず、また、新しい情報も全く含まないエピソードだとして、このカットを支持する研究者も多くいる。しかし、この場面も詳しく調べてみると、それは、王にイングランド行きを命じられたハムレットが、命令通りにデンマークを出国するかどうかを観客が最終確認するための重要な場面であることが分かる。Q1もF1と同様に4幕4場のQ2-only passageを削除している。しかし、Q1では、カットの直後に独自の台詞が追加され、観客がハムレットの出国を確認できるような工夫が施されているのである。F1に見られる重要な情報の欠落がQ1では補修されているという点において、5幕2場のロード・スピーチは、4幕4場のQ2-only passageと似たケースと考えるべきなのではないだろうか。

むすび

本論では、5幕2場のQ2-only passageのうち、多くの研究者が当然のカットとして理解を示してきたロード・スピーチに焦点を当てて、フェンシング・マッチに関する情報の流れという視点から分析を試みた。カットの行為者は、ロードという一見無駄な登場人物とその台詞を節約した上で、直後のホレイシヨの台詞にQ2にない‘this wager’という2語を補うことによって、カットによって生じる文脈の綻びを巧みに繕うことに成功しているように見える。しかし、フェンシング・マッチに関する情報の伝達について詳しく調べてみると、F1では、ロード・スピーチとともに、フェンシング・マッチに関する重要な情報までもカットされてしまっていることが分かった。

Q2では、ハムレットが死の予兆である胸の痛みを訴えるオーギュリ・スピーチは、ロードにより王一行の到着が予告され、ハムレットも試合を受け入れる最終的な意思表示をして、観客にも試合が目前に迫ったことが確認された直後に置かれている。このような、フェンシング・マッチが目前に迫った緊迫感とオーギュリ・スピーチとの連続性は、Q1でも確認することができた。それに対して、F1では、ロード・スピーチがカットされた結果、フェンシング・マッチが行われる時間と場所が曖昧なまま、しかも唐突な感じで、オズリック・エピソードからオーギュリ・スピーチに進んで行くのである。

Dover Wilson は、Q2-only passage 全般をカットした人物について、‘an experienced stage-hand qualified to prepare any ordinary play-book for performance’ と述べて、F1の印刷原稿はグローブ座から入手したものであるため、このビジネスライクな人物は、『ハムレット』の上演台本が作成されたに違いない1601年頃にグローブ座を主宰していたプロンプターに他ならないと結論付けている¹⁸⁾。本論の分析で、5幕2場のロード・スピーチをカットした人物についてそこまで特定することは困難だろう。しかし、それをシェイクスピア自身とする主張について筆者は懐疑的である。オズリック・エピソードの軽い雰囲気からロード・スピーチを挟むことによってより真剣な雰囲気へと転換し、さらに直後の重要なオーギュリ・スピーチへとつながっていく流れは、作者によって緻密に計画された展開であり、そこでロード・スピーチをカットしてしまうことは、直後のホレイシヨの台詞を一部変更するくらいでは補修できないような断絶を劇の展開に与えてしまうと考えるからである。このような断絶に作者自身が気付かないとは考えにくい。

それでは、ロード・スピーチをカットした人物は、なぜ直後のホレイシヨの台詞に2語追加するだけで済ませたのだろうか。Q1のように、フェンシング・マッチに関する重要な情報をオーギュリ・スピーチの前のどこかに盛り込むことはそれほど難しいことではないはずである。むしろ、カットした後の補修をできる限り簡略な手法で済ませている点に注目することが、F1のカットの行為者について今後考えるときに重要なヒントになるかもしれない。

カットの時期についてもそれを断定的に判断することは難しい。しかし、今回、Q1のオズ

リック・エピソードからオーギュリ・スピーチまでの台詞には、ロード・スピーチのエコーと見られる表現がいくつか存在していることを指摘することができた。これらは、一つ一つを取ってみれば、ロード・スピーチを知らなくても、Q1のレポーターが前後の場面展開から偶然に創作できる、非常に平凡な表現であることを認めなくてはならない。しかし、一つ一つは偶然性を排除できなくとも、全体としてこれだけの類似点が存在しているということは、Q1にロード・スピーチの何らかのエコーがあることを強く示唆しているのではないだろうか。

Q1ではF1と同様、ロードのパートが削除されているので、Q1の基となった上演台本にロード・スピーチがQ2と同じ形で含まれていたと考えるには、さらに決定的なエコーを見つける必要があるだろう。しかし、これだけのエコーがある以上、少なくとも初演時に、ロード・スピーチの一部がオズリックに相当する Gentleman の台詞に移植されていた可能性を考えざるを得ないのではないだろうか。Q2-only passage に含まれる重要な情報がQ1に移植されているというのは、それほど荒唐無稽な話とは思われない。実際、同じような現象が4幕4場のQ2-only passage の場合にも確認できるからである。

『ハムレット』のテキストの問題は、重要なテキストが3種類あることもあり、複雑で錯綜した様相を呈している。しかし、一番核心となる問題はF1の印刷原稿がどのような性質のものであったかという問題である。Nosworthy や Hibbard に代表される研究者たちが主張する、Q2とF1の異同の多くは、シェイクスピア自身が改訂したことに由来するという、いわゆる著者改訂説 (authorial revision theory) は支持者の多い有力な仮説である。しかし、一番目立ちやすいパッセージレベルの異同についてさえ、それを詳しく調べてみると、シェイクスピア自身による削除、あるいは追加とは簡単に納得できないものが少なからずある。本論では、5幕2場のQ2-only passage に焦点を当てたが、今後、3幕4場や4幕7場のQ2-only passage を分析することによって、著者改訂説の妥当性をさらに検証する必要があるだろう。

注

- 1) W. W. Greg, *The Shakespeare First Folio: Its Bibliographical and Textual History* (Oxford: Clarendon Press, 1955), 317-9.
- 2) J. M. Nosworthy, *Shakespeare's Occasional Plays: Their Origin and Transmission* (New York: Barnes and Noble, 1965), 139-141.
- 3) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, The Oxford Shakespeare (Oxford: Oxford University Press, 1987), 366, 368.
- 4) John Dover Wilson, *The Manuscript of Shakespeare's 'Hamlet' and the Problems of Its Transmission*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1934; reprint, 1963), 31-2.
- 5) *Ibid.*, 32.
- 6) Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1982), 400.
- 7) Philip Edwards, ed., *Hamlet*, The New Cambridge Shakespeare (Cambridge: Cambridge University

- Press, 1985), 242, 245.
- 8) *Hamlet* からの引用と act-scene-line numbering は原則, Philip Edwards 編集 The New Cambridge Shakespeare 版による。
- 9) Horace Howard Furness, ed., *Hamlet*, New Variorum Shakespeare, 2 vols (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1877).
- 10) Joseph Quincy Adams, ed., *Hamlet* (Cambridge, Massachusetts: Houghton Mifflin, 1929).
- 11) F1 では, ロード・スピーチ直後のホレイシヨの台詞が, ‘You will lose this wager, my lord.’ となっている。これは, ロード・スピーチをカットした結果, 直前のフェンシング・マッチに関するやり取りがすべて消えてしまったために, ここで話題をフェンシング・マッチに戻すための工夫だと考えられる。
- 12) BB の予兆は単なる胸の痛みではなく, 鼻血が出て体全体が震え, 最後には気絶してしまうという, Q2やQ1よりも派手なものとなっている。またBBでは, フェンシング・マッチは王の御前で行われるという設定になっている。ハムレットは, ‘When I thought of returning to the court, a sudden faintness came over me. What this may mean is known to the gods.’ と述べて, 気絶とフェンシング・マッチの因果関係, さらにそれが超自然的な存在からのメッセージであることをQ2やQ1よりもはっきりと説明している。BBからの引用は, Horace Howard Furness, ed., *Hamlet*, New Variorum Shakespeare に収められた Furness の英訳による。
- 13) Harley Granville-Barker, *Prefaces to Shakespeare: Third Series: ‘Hamlet’*(London: Sidgwick and Jackson, 1937), 170.
- 14) Q1からの引用と scene-line numbering は原則, Kathleen O. Irace, ed., *The First Quarto of Hamlet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998) による。
- 15) *Ibid.*, 4, 113.
- 16) たとえば, 4幕4場の最長のQ2-only passageに見られるQ1との一部表現上的一致について Jenkins や Edwards は, 劇を短縮する過程で, 短縮の責任者が残しておきたいと思うような断片的な情報を foul papersから移植した可能性を指摘している。
- 17) 4幕4場のQ2-only passageについては, 『『ハムレット』 4幕4場のフォリオ版の削除部分に関する一考察』, 『新潟大学経済論集』第90号(2011年3月)参照。
- 18) Dover Wilson, *The Manuscript of Shakespeare’s ‘Hamlet’ and the Problems of Its Transmission*, vol. 1, 32-3.